

# 「なぜ、はるばるベトナムから日本に来て、カインズホームなのか？ :ベトナムにおけるサポーターティング産業の発展と日本の知的協力ワークショップ報告」

松 尾 昌 宏

## 1. ワークショップ報告概要

去る2004年7月23日、産業研究所主催にて、ベトナムのダナン大学より、先方の学長以下、3人の先生方をお招きして、本学崇貞館会議室において、ベトナムのサポーターティング産業形成問題と、それに対する日本の知的協力の役割に関するワークショップが開かれた。本稿では、以下にその際の報告概要を説明していく。

まず、第一報告では、筆者より、後発国における工業育成の困難性、とりわけ量産組立部門の進出と、サポーターティング産業の育成との間ではたらくある種の「悪循環」のメカニズムを基礎として、先行する他のASEAN諸国および中国との輸出競争に置かれたベトナムの成長環境の厳しさを指摘した。また、他方でこうした悪循環を打ち破る上で必要な産業政策も、日本のみが特殊な時代環境下で、膨大なコストと時間を掛けた末、ようやく成功した一方で、他のアジア諸国ではあまり成功を収めておらず、ベトナムでの産業政策の有効性に対する疑問が提示された。

第二報告では、産業研究所準研究員のド・マン・ホーン氏より、やはり中国との競争激化と、上記の悪循環の問題が指摘された上、これを打破するための社会能力向上のための人材育成など知的協力の意

義が論じられ、その具体的取り組みとして、タイの裾野産業育成における、タイ日経済技術振興協会(Thailand-Japan Technology Promotion Association : TPA)による人材育成の取り組みの概要とその仕組み、成果が紹介された。

第三報告では、ダナン大学のレ・ティ・ゾーイ副学長およびダン・コン・チュアン先生より、ベトナムの人材供給の現状、部門別発展の状況が紹介され、さらにベトナムのビジネスサービスや人材面の問題点と、サポーターティング産業の育成に必要な諸条件およびその解決法が示され、さらにはそうした問題の解決における日本の役割が示された。最後にコメンテーターの早稲田大学のラン・ヴァン・トゥ先生より、各報告者の報告に関するコメントがなされた。

以上、ワークショップ報告内容について、簡単に説明してきた。しかし、筆者にとって、ある意味、報告内容それ自体以上に興味深かったのは、ワークショップ翌日のエクスカージョンにおける、先方の先生方の行動であった。一見、本題とは何の関わりも無いようなこの経験であるが、筆者には、ある意味、ベトナムのサポーターティング産業育成に伴う問題と共通の要素を、その底流で共有しているように感じられた。したがって以下では、このことについて論

じていきたい。

## 2. エクスカーションでの経験

さて、ワークショップ翌日、ベトナムの先生方3人、現在日本留学中の学長の御子息、本学経済学部教授の岩井先生、本研究所のド・マン・ホーン氏および筆者の7名にて、大型タクシーをチャーターして、東京見物のエクスカーションに出かけることとなった。本来の目的地は、両国の江戸東京博物館であったが、それ以外にも折角の機会ということで、時間も十分にあるので、先方の要望に応じて色々案内することとなった。さてそれでは、どこに行くのであろうか。筆者の感覚では、やや失礼ながら、正直日本の大都会は、先方の先生方にとって興味深いものであろう、国会議事堂か、皇居か、東京タワーか、あるいは新宿の摩天楼ビル群であらうか...と、色々想像していたのであるが、先方のリクエストで最初に行ったのは、町田西部、相模原近くのカインズホームであった。なんでも学長およびその御子息が頑丈な鍵を必要としているとのことである。その間、他の二人の先生方も、色々和金物類を物色しておられ、結局そこで約2時間を費やした。その後、都心へと向かい、東京両国近くで食事の後、江戸東京博物館へと入った。当初予定の見学時間は50分間ほど、時間的にやや窮屈で、ベトナムの先生方も気の毒だなと思い、中へと入った。中には江戸時代の町並みが再現され、当時の人々の生活がわかるさまざまな展示物が置かれていた。なかでも筆者が興味を引かれたのは、江戸時代の流通に関する展示と、吉原の遊郭に関するものであった。ところがベトナムの先生方はどんどん先へと進まれ、結局中にいたのは30分ほど、

ほとんど素通りであった。展示品の説明が日本語と英語のみであったことも、興味を持たれなかった一因かも知れないが、それにしても、あまりに短く、やや物足りなさを感じつつ、博物館を出た。

さて、その後、先方の要請で向かったのは、新宿...とは言っても、摩天楼のビル群見学のためではなく、ビッグカメラでの買い物のためであった。ここではまた2時間を費やし、ベトナムの先生方はここでもいっぱい買い物をされた。その後、予定の時間が来たので、京王線にて、高尾の送別会会場へと向かった。

しかし、それにしても、せっかくはるばるベトナムから来て、一体なぜ、カインズホームであり、ビッグカメラなのであろうか？。買い物ならベトナムでもできるではないか...、異国に来たのであれば、本来その国でしか見られないものを見たいものではないのか...と、当初は謎だらけに感じられた。しかし、よくよく考えた末、彼らには彼らなりの合理的な理由があったのだと、薄々わかってきた。以下でその理由を見ていきたい。

## 3. ベトナムの市場規模と、商品の専門化

さて、「分業は市場の大きさに依存する」とは、経済学の創始者、アダム・スミスの有名な命題である。とりわけ筆者は、都市規模と、流通の専門化の関係を目にするとき、この命題の有効性を実感する。東京から地方都市に住んだ経験のある人なら、ちょっと特殊な商品になると、とたんに入手が困難になるという経験をお持ちであろう。さらに小さな都市となると、なんでも屋が増える一方で、品揃えは悪くなり、大都市では別々に運営されていた業態が、やたら兼業で賄われるようになる。筆者が以前住

んでいた京都府亀岡市(人口10万弱、周辺都市含めて12万ほど)でも、本屋でジャケットが売られていたりして、身の回り品の多くは、市中心部の西友とサティにほとんど依存していた。市内に映画館はなく、音楽ホールも最大で200人余りの収容力、書店は最大のものでも町田ルミネの有隣堂ほどの規模もなく、専門書の購入など望むべくもないといった有様であった。

それでは、ベトナムの市場規模はどの程度であろうか。まず、一人あたりGDPは400ドル程度、日本の90分の1である。人口は8200万、したがって、国全体でも日本の90万都市ぐらいの市場規模しかない。しかもエンゲルの法則など、需要には階層性があり、そのため恐らくこのなかに農産物の占めるシェアは日本よりもはるかに高く、その分、工業サービス品に対する需要はさらに小さいであろう。しかもこの市場が、南北に長い国土、インフラの乏しさもあって、さらに細かく分断されている。そのなかで最大のホーチミン市の人口が550万、同市の一人あたりGDPは全国平均の2倍程度とのことであるから、ベトナム全体の7分の1、したがってやっと、日本の12万都市程度、亀岡と同程度のGDPである。これでは先進国の巨大流通業者も、進出には二の足を踏むであろう。しかも、道路等インフラの乏しさにより、ベトナム国内からこの最大のホーチミン市に出ることすら、容易ではない。近年の道路整備でいくらかましにはなったそうであるが、それでも北部にある首都ハノイから南部のホーチミンまでは自動車でも38時間掛かるという。そうすると中部のダナンからでも恐らく20時間近くは掛かるであろう。となると、飛行機でも使わない限り、気軽にホーチミンまで買い出しに...とはいかないであろう。そう

なるとダナン自身で賄う必要がある。ダナンはベトナム第3の都市であるが、それでも人口は80万程度、GDPは日本の1万都市を少し上回る程度であろう。そうすると、日本の大都市では当たり前のように手に入る日用品の非常に多くのものが、入手困難となる。したがって今回の日本訪問は彼らにとって、普段なかなか手に入らないものを入手する貴重な機会であったと考えられる

#### 4. サポート産業形成問題に関する示唆

以上のような事情は、恐らく工業部品や材料の入手についても存在するであろう。その結果、ベトナムは、部品材料の入手の困難性が、組み立てメーカーの進出を阻み、そのことが部品産業の発展を妨げるといふ、ある種の「悪循環」メカニズムがはたらきやすいであろう。ベトナムの先生方の日本での行動は、ある意味、そのことを象徴的に示すものであったように思われる。その意味では、今回のプロジェクトに示唆するものは、大きかったように思われる。

しかしその一方で、最後まで謎として残ったのは、産業研究所所長のI先生の、以下のような一言であった。私がベトナムの先生方が買い物には熱心である一方、観光には無関心であるのが不思議であると申し上げたところ、I先生は、「そうですか？私もドイツでは買い物好きですよ。観光名所って、同じようなところありますしね！...」(そっ、そうかなあ...?)とのお答えであった。このことだけは、いまだに謎であり、今後の研究課題である。